

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

■ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:08 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1303-04] 体育哲学／口頭発表②

座長:竹村 瑞穂(東洋大学)

10:10 ~ 10:38

[00哲-口-03]

コーチングの共同行為における「主体性・自律性」の位置づけ
行為理論的検討を通して

*井手上 新¹ (1. 日本体育大学大学院)

10:40 ~ 11:08

[00哲-口-04]

実践からのコーチング哲学
スポーツ・インテグリティのインテグリティについて

*高尾 尚平¹ (1. 日本福祉大学)

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:08 🏢 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1303-04] 体育哲学／口頭発表②

座長:竹村 瑞穂(東洋大学)

10:10 ~ 10:38

**[00哲-口-03] コーチングの共同行為における「主体性・自律性」の位置づけ
行為理論的検討を通して***井手上 新¹ (1. 日本体育大学大学院)

コーチングはスポーツ指導に関する活動の総体として考えられることからコーチングには様々なアプローチが含まれる。その中の1つにアスリートの主体性や自律性といった人間的成長を促す人間的アプローチがある。このアプローチはコーチングを行うために重要なアプローチと主張される一方で、コーチング実践において適用する困難さも主張されている（Cross & Lyle, 2008）。適用を困難にする要因の1つとして、人間的成長のゴールが曖昧だということが挙げられる。というのも、コーチは人間的アプローチによってアスリートの「主体性」や「自律性」などを成熟させようとするだろうが、目指すべき、成熟したアスリート像が十分に示されないからである。そしてこの問題は、「主体性・自律性」をどのように考えるかという問題に依存する。本発表はこの「主体性・自律性」についての検討を中心に行うものである。一般的に「主体性・自律性」といった際に、個人の選択、決定から行動するように、行為が個人の意図に還元されている状態が想像されるだろう。つまり、自己完結的なものを想像する(早川, 2010)。しかし、このような自己完結的な「主体性・自律性」からでは自己と他者の交流のもとで生じる関係性や制約を反映することはできず(早川, 2010)、我々の行為や行為者としてあり方を適切描き出しているとは言い難い(筒井, 2014)。そして、これらの自己完結的な「主体性・自律性」に対する指摘は、選手とコーチの相互関係を前提とするコーチングの活動においては一層、重要な指摘になると考えられる。そこで本発表では、まず、意図する行為とはどのような行為なのかを行為論の枠組みから整理し、その後、他者との関わりの中での、意図する行為とはどのような行為なのか共同行為論の枠組みを用いて整理することで、自己と他者との関係が考慮された「主体性・自律性」を示すことを目指す。

専門領域別研究発表 | 専門領域別：体育哲学

⌚ 2025年8月29日(金) 10:10 ~ 11:08 🏢 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[3a1303-04] 体育哲学／口頭発表②

座長:竹村 瑞穂(東洋大学)

10:40 ~ 11:08

[00哲-口-04] 実践からのコーチング哲学

スポーツ・インテグリティのインテグリティについて

*高尾 尚平¹ (1. 日本福祉大学)

本研究の目的は、スポーツ・インテグリティの概念について批判的に検討し、この概念のもとでなにが語られ、なにが語られえないのかを示すことにある。本研究の出発点は、私自身のコーチング実践にある。私は、バスケットボールのコーチのライセンスを取得すべく、コーチ養成講習会に参加した。講習会では、理論・演習科目において「スポーツ・インテグリティ」に関する説明がなされた。しかしながら、講習会におけるスポーツ・インテグリティに関する説明は、具体的な内実を欠くものであり、極めて拡散的な内容であった。一人のコーチとしての私はその説明に戸惑いを禁じえなかった一方で、研究者としての私にはスポーツ・インテグリティという語が学問的に鍛えられた(disciplined)概念なのかという疑問が生じた。本研究の問題意識は、コーチであり研究者である私の実存にもとづいている。本発表のねらいは、現場から生じた問いを学問的議論の俎上に載せ、スポーツ・インテグリティに関する諸言説を編みなおすことにある。本発表では、まず、スポーツ組織や公的な機関が発するスポーツ・インテグリティの定義を参照する。次に、先行研究の成果をもとに、スポーツ界でインテグリティという語が用いられるようになった経緯を確認する。そのうえで、学問におけるスポーツ・インテグリティの定義やこの語が使用される文脈を精査する。最終的に本発表では、現状のスポーツ・インテグリティの概念の空洞性とそのことにより生じうる問題を指摘する予定である。